沖縄の結納と結婚披露宴

東本　萌

１．はじめに

各地の結納・結婚披露宴にはその地域によって様々な特徴があらわれている。特に結納においては、結納品や結納の時間帯、結納を行う場所など、地域差は顕著なものである。

今回沖縄での現地調査を行う前の事前調査の段階では、沖縄の結婚披露宴に他の地域とは異なった特徴があることに興味を持ち、そのことについて調べるつもりで沖縄へ向かった。ところが沖縄に行ってみると、市場のあらゆるところで結納品店をみることができ、沖縄において結納が特別な儀式であることが感じられた。自分の住んでいる地域では結納品などあまり目にすることがなく、これは大きな発見であった。

そこで、沖縄での調査対象を結婚披露宴だけでなく、結納にも広げ、二つの結婚に際して行われる儀式を同時に探ることによって、沖縄における結婚の意味を考え、分析をしていきたいと思う。

今回の調査では、結納品店１店、結納料理を扱っている惣菜店１店、結婚代理店１店で、代表者の方々に結納に関する話を聞くことと、結婚披露宴会場１会場で、１件の結婚披露宴を見学させてもらうことができた。

２．結納

（１）沖縄における結納

結納とは、新郎側が新婦側へ婚約の意思を公にし、家族・親戚に認め知ってもらうと同時に、両家が新しく親戚関係を結ぶにあたり、末永い繁栄を誓う儀式でもある。

沖縄では、その結納を行う場所・時間に特徴があり、そこには沖縄の、祖先を大切にし、伝統を守る精神を認めることができる。

結納は一般的に、床の間で行われるものだが、沖縄の場合床の間には多くの家庭で仏壇が置かれており、その仏壇の前で結納を執り行うのが普通である。本土の結納の場合、仏壇が重要視されるのは、仏前で行う結婚式、つまり仏前式のときであり、結納を仏壇の前で行うのは沖縄の結納の特徴である。

また、結納を行う時間にも沖縄特有の決まりがあり、結納は干潮から満潮までの間に終わらせなければならない。これは、「潮が引いていく時間（満潮～干潮）は死ぬ人が多く、潮が満ちていく時間（干潮～満潮）は生まれる人が多い」といういわれや、「潮が満ちていくさまにあやかり、この縁談も上向きに発展してほしい」という願いからである。これらから沖縄の人々にとって、潮の干満というのは儀式を行う上で欠かせない要素であることがわかるし、その時間帯にしたがって生活をしていることが

うかがえる。また満潮干潮の時間は、毎日の新聞や、「沖縄手帳」という沖縄で生活する人のために作られた手帳にも掲載されており（写真１）、やはり潮の干満が生活する上での時間基準をつくっていると考えられる。

沖縄において結納は、祖先に対する信仰を忘れず、伝統を現在まで受け継いできた儀式なのである。

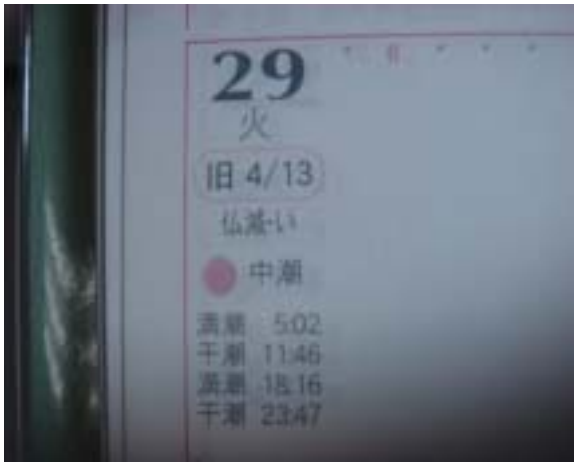

写真1　沖縄手帳

（２）結納と天ぷら

新郎側が新婦側にもっていく結納品はほとんど本土の関東型のものと同じである。長のし、御帯料、勝男節、寿留女、小生婦、友白髪、末広、家内来多留、目録書の９品を結納品として収める場合が多い。

写真2　天ぷらセット

沖縄特有の結納品としては、結納料理盛と天ぷらセットが挙げられる。料理盛は、赤かまぼこ、かすてら、豆腐、花イカ、田芋、魚天、豆天など一つ一つ縁起物として意味を持った料理が大きな器に盛られ、新郎側が用意して新婦の家に持っていくものである。また、天ぷら（サーターアンダギー）セット（写真２）は沖縄でしかみられない結納品であり、形状の違う天ぷらが詰められている。これらの形状にはそれぞれ意味があり、沖縄の人々には一般的に知られている。

・サーターアンダギー

「黄金（クガニ）魂（ムドシ）」とも呼ばれ、女性の腹を意味している。昔から、女性が丈夫で立派な子どもを産むと、よくできた子どもたちを産みわける立派なお腹といって、世間一般では「黄金腹（クガニワタ）」と褒めていた。このサーターアンダギーは、これから嫁になる女性が「黄金（クガニ）の子宝」を産むようにと願いをこめて、新郎側がおくるものである（写真３）。

写真3　サーターアンダギー

・白アンダギー

「カタハランブー」とも呼ばれ、女性の「黄金腹」に対して、男性の「白銀（ナンジャ）の子宝（セイシ)」を意味している。子孫を繁栄させることを祈願して女性宅に届けるものである。作り方が難しいため、現在白アンダギーを作れる人は少なくなっている（写真４)。

写真4　白アンダギー

・松風（マチカジ）

赤いセンベイ菓子であり、二人の縁を結ぶという意味で、“結び切り”のかたちをしている（写真５)。末永くいつまでも仲良く幸福に暮らすということを意味している。

写真5　松風

これらの天ぷらはすべて結納料理店で購入することができ、結納に持参する際には、それぞれ 17 ヶ、17 ヶ、7 ヶなど、割り切れない数を詰め合わせて贈るのが一般的になっている。

このように、結納の席で天ぷらセットが出されるようになったのには、沖縄の人々の食習慣が関係している。沖縄では昔、豆腐やイモなどが主食で、米や砂糖（黒砂糖）は貴重品であった。そのため、煎餅やお菓子などの甘いものはなかなか食べることができなかったのである。そのかわり、結納などの祝いの席では普段なかなか食べることのできない、砂糖を使った料理を振舞い、その喜びを味わっていたのだ。またその料理は近所にも配られ、みんなで喜びを共有していた。

（３）結納の意味

結納の語源には、婿方から嫁方へ婚姻の申し込みをするという意味の「言い入れ」に由来するという説や、労働交換の慣行としての「結（ユイ)」と同義語であるとする説がある。本来、結納は婿となり、嫁となるべきものが直接授受するものであったが、家父長制の台頭とともに、女子は家長の財産であり、資本であるという考え方が発達し、物品財貨を花嫁の代買の意味で授受するようになったのである（中山 1956)。

似たような考え方は沖縄にも存在し、沖縄本島は土地を割り当てて耕作させ、人頭税をとる制度であったために、個々の家々で娘の労働力が貴重であった(瀬川 1969)。

そのため婿が「ドゥシル（婿が嫁をもらうために嫁家へ納めるお金）」を持って嫁家へいき、労働力の代わりにお金を納めるのである。

（４）結婚と共同体意識

沖縄方言で、嫁入りは「ニービチ」と呼ばれており、これを漢字に直すと「根引き」（ニー＝根、ビチ＝引き）となる。「ニー（根）」を含んだ言葉には「ニービチ」の他にも、「ニームトゥ」（根元：本家）や、「ニッチュ」（根人：本家の頭首）、「ニガミ」（根神：村落の祭祀をつかさどる女祭司）などがあり（渡邊 1990）、これらの「ニー（根）」の使われ方をみると、家や村落などの共同体を示す言葉として使われていることがわかる。村落などはどこでも共同体意識の強さが伺えるものだが、沖縄の場合は特にその面が顕著に現れていると思われる。

先述したように、家々にとって女子は貴重な労働力であり、共同体にとってもそれは同様であった。新婦側が労働力を納める代わりに、新郎側が「ドゥシル（お金）」を提供するという、物々交換のような形式は、家々が共同作業をする場面が減ってくると共に、労働力を提供するという意識はなくなっていったが、現在のように新郎が結納金を納めるという形は残ったのだと考えられる。

３．沖縄流結婚披露宴

（１）会場

今回のフィールドワークでは、那覇市内の結婚式場「マリエールオークパイン」で行われた披露宴を見学した。「マリエールオークパイン」には、２・３・４階に披露宴会場があり、いずれも 400 名以上の収容が可能で、すべての会場に余興用の舞台がついている。沖縄の披露宴では、招待客数が 200 名を超えることが少なくないため、多くの披露宴会場は数百人単位での収納ができるようになっている。また、舞台のついていない披露宴会場は余興ができないため、需要があまりないという。

（２）式次第

今回見学した披露宴の式次第は、次のようになっている。この中で本土には見られない特徴としてあげられるものがいくつかある（下線部分）。

１．新郎・新婦挨拶	９．ケーキ入刀
２．親戚代表挨拶	１０．記念品贈呈
３．乾杯	１１．来賓祝辞
４．<u>かぎやで風</u>	１２．<u>余興（２）</u>
５．水あわせの儀	１３．祝辞
６．<u>余興（１）</u>	１４．カチャーシー
７．ビデオ上映	１５．花束贈呈
８．キャンドルサービス	１６．両家代表謝辞

・かぎやで風

沖縄では祝賀の時に座開きとして踊られる祝儀舞踊で、数ある舞踏の中でも人々に最も敬愛され親しまれている古典舞踊である。三線を使った音楽に合わせて演舞者がゆっくりとした動きで踊る。

・余興

新郎新婦の友人や、会社の同僚などが、舞台上で出し物をすることで、何週間も前から練習や準備をするという。今回見学した披露宴では、舞台上での余興が３組、ビデオでの余興が２組披露されたが、いずれも工夫の凝らされた、ユーモアある余興であった。本土の結婚披露宴でも余興のようなものは行われるが、舞台があるかないかは大きな違いといえるだろう。

・カチャーシー

余興とは別に、新郎新婦も含め参加したい出席者全員が舞台へ上がり、三線の早弾きにあわせて踊るものである。かぎやで風のように、踊り方が決まっている厳粛な踊りというよりは参加者が楽しみ､盛り上がるために踊るものであるように感じられた。

（３）座席について

さらに沖縄と本土の披露宴との違いには、出席者の座り方がある。

本土の場合、上席から主賓、上司や恩師（目上の人)、先輩、友人、親戚、家族で、両親が末席に座るのが一般的であるが、沖縄の場合はこれが全く反対になっている。沖縄での一般的な座り方は以下のようになっている（図１)。

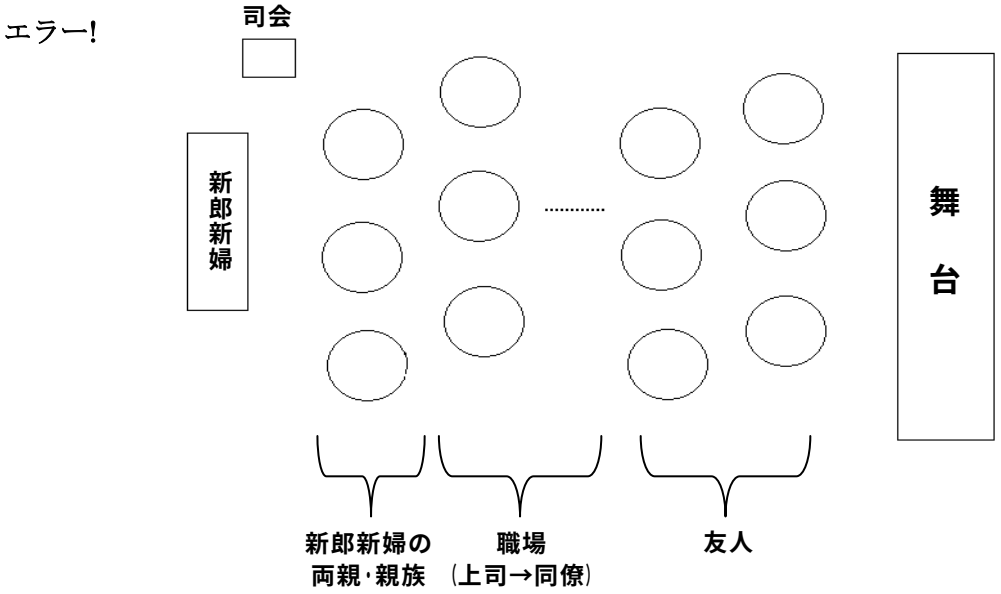

図1　会場の座席

この違いから、本土では「社会的」結びつきを、沖縄では「血縁的」結びつきを重視した形をとっていることが分かる。

（４）なぜ派手な披露宴が行われるようになったのか

昔沖縄では、結婚式を行ったあとに披露宴のような宴会が開かれていた。その宴は新郎の屋敷で開かれるのだが、屋敷に入りきらない男友達は、母屋の前の広場や、新郎が借りた屋敷などで接待された。また那覇では接待係にズリ（遊女）[1)]を頼んでいたので、ずいぶん乱痴気騒ぎをしたという。戦後は婚礼の挙式方法が、本土の影響でほとんど神前式に変わり、披露宴の場所も何百人も収容する大ホールでするのが一般的となったが、戦前の盛大に行われる宴の名残が消えず、現在も余興が行われたり、カチャーシーをみんなで踊ったりするという、宴会のような披露宴が催されているのだと考えられる。

４．おわりに

沖縄での現地調査を通じて、沖縄において結納は祖先や親族に結婚することを報告するための大切な儀式であることが明らかになった。また、沖縄の結納は昔から受け継がれてきた共同体意識が根底にあるものではないか、という考察までたどり着くことができた。そして結婚披露宴に実際に参加したことによって、よりリアリティーをもって沖縄の結婚の儀式というものを考えることができたと思う。

今後は沖縄以外の地域の結納について調査をし、沖縄同様、昔からの伝統が受け継がれて現在の結納に影響を与えている地域を探して、比較していきたいと思う。

注

1)かつて沖縄ではズリ（遊女）は結婚の際は欠かせない存在であった。夫婦固めの儀礼が終わると花嫁は里帰りしたが、花婿は友人と引き連れて遊女のもとへ行き、３、４日ほど過ごし、新妻と同棲生活を始めるのは４、５日たってからであった。

参考文献

瀬川清子（1969）『沖縄の婚姻』岩崎美術社
中山太郎（1956）『日本婚姻史』日文社
源武雄（1972）『日本の民族　沖縄』第一法規出版株式会社
渡邊欣雄（1990）『民俗知識論の課題―沖縄の知識人類学―』凱風社